

【68年5月／移民】

移民との連帯

——アルジェリア独立戦争から68年5月へ

大嶋えり子

(金城学院大学)

1. はじめに——68年5月において移民は周辺的な存在だったのか

68年5月の一連の出来事の中で、移民や外国人による運動は周辺的で限定的な影響しか持たなかったとされている。たしかに、移民が中心的な役割を担ったとは言い難いだろう。たとえば、イヴァン・ガストーは「外国人労働者の役割は（中略）補助的だった」としている¹。そもそも68年以前までは、移民労働者は帰国する可能性があるため、積極的に運動を行うとは考えられていなかった。

しかしながら、この時期の社会運動において彼ら・彼女らを周辺的なアクターとして捉えるべきではないだろう。特に1945年以降に労働の担い手としてフランス本土に大勢移動してきたアルジェリア人はOS (Ouvrier Spécialisé) と呼ばれる機械工の大部分を占めており、労働や集住していた地区の住宅に関して問題意識を持っていた。運動を起こしたい、運動に参加したいと考える移民は少なくなかった上に、参政権を持たない外国籍の彼ら・彼女らが問題提起をすること自体が極めて政治的な行動だったといえる。

以上を踏まえると、中心的なアクターではなかったとはいえ、移民を周辺に追いやり、無視して68年5月を語ることはできないだろう。そのため、本稿では人数が多かったマグレブ出身の移民がいかに68年5月を生きたのか、そして移民がこの歴

¹ Gastaut, Yvan, *L'immigration et l'opinion en France sous la V^e République*, Seuil, 2000, p. 37.

史的出来事とどう関係していたのかを検討していく。

なお、用語について説明しておく。「移民」とはフランス本土以外から本土に移動してきた者やその子孫を指す。ゆえに、フランス政府が採用している移民の定義、すなわち「外国で外国籍として生まれ、フランスに在住する者」と重なる部分を持ちつつ、異なる点に留意したい。また、「外国人」とは、外国籍を保有する者を指す。さらに、本稿では「アルジェリア人」という言葉を使用するが、1962年にアルジェリアが独立したため、独立前については「アルジェリア人」はフランス国籍を持つアルジェリアの先住民、主にアラブ人を意味し、独立後についてはアルジェリア国籍を持っている者とアルジェリアに出自を持つ者を指す。そして「フランス人」とはフランス国籍を有している者ではなく、フランス社会のマジョリティである白人を指している。これらの用法はほとんどの先行研究に共通したものである。

2. マグレブ系移民の背景—戦後の労働力とアルジェリア独立戦争の遺恨

第二次世界大戦後、フランス本土に在住する外国人で最も多かったのはイタリア人とスペイン人だった。その後、フランス領だったアルジェリアをはじめとするマグレブからもフランス本土への移住が増えていった。1968年には1962年に独立したばかりのアルジェリアを出身地とする外国人が47万人以上に上った。この年の外国人の総数は約262万人であり、外国人に占めるアルジェリア人の比率は約18%となる。モロッコ人とチュニジア人も含めると約62万人になり、1968年のマグレブ出身者は外国人の内24%となる²。外国人の中でも割合が多いマグレブ出身者が68年5月の一連の出来事をどう生きたのかを考える上で、まずはどういった背景を持ってフランス本土に移住し、移住後にどのような生活をしていたのかを概観していく。

経済的背景

戦後のフランスは「栄光の三十年間 (Les Trente Glorieuses)」と呼ばれる経済成長を体験した。この経済成長を支えたのは移民労働者だろう。とりわけ、植民地から移動してきた者が労働力不足を補った。

² Rabut, Odile, « Les étrangers en France », *Population*, 29^e année, n° 2, 1974, pp. 148-150.

アルジェリア人に限っていえば、戦間期においてまだフランス本土にさほど在住していなかった。しかし、第二次世界大戦直後から、本土における労働力の需要とアルジェリアの人口増および農業の機械化による雇用の削減といった要因によりアルジェリア人が本土に移動するようになった。しかも、アルジェリア人はフランス国籍であったため、1945年にフランス政府が労働力確保と人口調整のために導入した国立移民局（Office National de l'Immigration, ONI）の規制の対象とはなっていなかった。アルジェリア人はフランス社会に統合できない文化的な差異を持っていると世論や経営者たちは考えていたが、その一方で経営者にとって扱いやすい労働力でもあったのだ。こうした背景により、1954年には、本土在住アルジェリア人の数は1946年の6倍にまで上った³。

戦後の経済成長に伴って多くのアルジェリア人が本土に移動したとはいえ、彼らは移民の中でも最も貧困であり、スラム街に住んでいた。失業者も少なくなかった。なお、こうした状況に鑑み、フランス共産党（Parti Communiste, PC）や共産党に近い「反人種主義と諸民族間の友好運動」（Mouvement contre le Racisme et pour l'Amitié des Peuples, MRAP）などの市民団体はアルジェリア人が直面する搾取や劣悪な住宅の問題を提起していた⁴。

アルジェリア独立戦争下のアルジェリア人移民

本土におけるアルジェリア人移民の数は独立戦争中に倍にまでなった。アルジェリアの雇用情勢が悪く、本土に仕事を探しに行く必要があったからである。多くの移民は労働力となる20歳から40歳までの男性だった。さらに、本土ではアルジェリア独立戦争に兵を送ったため、不足した労働力を補うためにアルジェリア人労働者が必要であった⁵。

1954年に勃発するアルジェリア独立戦争に伴い、本土のアルジェリア人労働者は

³ Lequin, Yves, « Les vagues d'immigration successives », Yves Lequin (dir.), *Histoire des étrangers et de l'immigration en France*, Larousse, 2006, pp. 396-397.

⁴ House, Jim, « Pour une histoire des solidarités franco-algériennes, 1954-1981 », *Plein Droit*, n° 75, 2007, p. 37.

⁵ Stora, Benjamin, *Histoire de la guerre d'Algérie 1954-1962*, La Découverte, 2004, pp.40-41.

二つの点において苦しい立場に置かれるようになった。一つ目の点は、国家権力による暴力である。1961年10月17日のアルジェリア人によるデモの鎮圧でその暴力は頂点に達した⁶。警察による鎮圧は大勢の非武装のアルジェリア人の殺害を伴った。国家権力によるアルジェリア人を対象とした検挙や身体的暴力は日常的であり、アルジェリア人は恐怖の中での生活を強いられた。以前から、アルジェリア人はフランス国籍を有する「原住民 (indigène)」と呼ばれる下等市民として厳しい管理および監視の対象であった上に、独立戦争により国家の潜在的な敵として認識されるようになり、さらなる暴力の被害に遭ったのである。

もう一つの点は、独立派勢力間の対立である。アルジェリアの独立を求める勢力は複数あったが、代表的なのはアルジェリア民族解放戦線 (Front de Libération Nationale, FLN) とアルジェリア民族運動 (Mouvement National Algérien, MNA) である。この両者はアルジェリアとフランス本土で熾烈な覇権争いを繰り広げ、地中海の両側において支持者の拡大を目論んだ。アルジェリアでFLNが力を増す中、本土ではMNAが支持者を集めており、FLNは本土在住のアルジェリア人の福祉にも取り掛かり、支持を得ようとした。したがって、本土のアルジェリア人たちは警察をはじめとする国家権力による取り締まりとFLNによる圧力の中で、苦しい生活を送らざるを得なかったといえる。

ただし、独立派諸勢力や警察に怯えていたことにアルジェリア人移民の生活を矮小化できない点には留意するべきだろう。彼ら・彼女らも主体的に政治的な活動を行っていたからである。1961年10月17日のデモは夜間外出禁止令が出ていた中で行われた大規模かつ高度に政治的な運動だった。さらにさかのぼれば、アルジェリア人移民は反植民地主義を掲げたデモを1953年や1956年にもパリで行っていた。これらの反植民地主義デモの中で、アルジェリア人移民は運動の経験を蓄積していった。

1962年まで続いた戦争の末、アルジェリアは独立を獲得し、フランス本土在住のアルジェリア人たちはフランス国籍者ではなく、アルジェリア国籍者、すなわち外国人となった。彼ら・彼女らはフランスの在留資格を得たため、多くのアルジェリ

⁶ 詳細については以下を参照されたい。Einaudi, Jean-Luc, *Octobre 1961 : un massacre à Paris*, Fayard, 2001.

ア人は解放されたアルジェリアに帰ることはなかった。しかも独立したてのアルジェリアの賃金は低かった。フランス在住のアルジェリア人労働者の待遇がいいとは言えなかったが、出身国における待遇よりもはるかによかったため、フランスに移住するアルジェリア人は増えていく一方であった。

無関心なフランス本土社会と独立戦争の遺恨

アルジェリアにおける戦闘、本土におけるアルジェリア人移民の増加、警察によるアルジェリア人に対する暴力、独立派勢力の対立など、フランス社会が独立戦争に関心を寄せる要因は複数あった。しかしながら、フランス社会はアルジェリア独立戦争を自身にとって重要な出来事、あるいは自身が当事者となる出来事だと認識するまでかなりの時間がかかった。

フランス人、つまり本土の白人が独立戦争に関わる運動を複数起こしたことは事実である。たとえば、1957年にはフランス軍による拷問に対する反対運動が始まり、1960年代に入ると平和を求めフランス軍の活動に反対する学生が主体となった運動などが見られた。しかしながら、1954年に戦争が始まった点に鑑みると、これらの運動は開始するまで時間を要したと言わざるを得ない。さらに、当時の世論調査によれば、独立戦争はフランス本土社会にとって優先順位の低い項目だった。

こうしたフランス本土社会による無関心は無知から来たとは考えにくい。なぜならば、本土でもアルジェリア独立戦争に関わる出来事は起きていたし、地中海の反対側で起きている出来事に関しても決して情報がなかったとは言えないからである。政府による情報統制があったことは確かだが、200万人近くの兵がアルジェリアで戦ったことを考えると、本土にいたその家族や知人たちが何も知らされていないなかったとは考え難い。1958年には拷問の実態を綴ったアンリ・アレグによる『尋問』⁷が発表され、6万部以上売れた。

バンジャマン・ストラは、アルジェリア独立戦争の直視がヴィシー政権に類似したフランスの暗部と向き合うことを意味したため、フランス本土社会は独立戦争から目を背けたと指摘している⁸。知識人や学生など、独立戦争中に運動や言論活動

⁷ Henri Alleg, *La Question*, Éditions de Minuit, 1958. アンリ・アレグ『尋問』長谷川四郎訳、みすず書房、1958年。

⁸ Stora, Benjamin, *Histoire de la guerre d'Algérie 1954-1962*, *op. cit.*, pp. 65-67.

を行った者はいたが、フランス本土社会が概ねアルジェリアの行方に無関心であったことは確かといえよう。

こうした無関心とともに、独立戦争はフランス本土社会にアルジェリア人移民に対する不信感をもたらした。戦争状態の中でアルジェリア人は敵であり、潜在的に危険な存在として認識されたため、戦争終結後もアルジェリア人移民は生きづらさの中で生活を送った。たとえば、解放直後のアルジェリアからフランスに移住したあるアルジェリア人は次のように60年代を振り返る。

当時の〔フランスの〕失業率は〔出身国と〕比較できないほど低かったのに「帰国しろ。フランス人の仕事を奪いやがって」と言われることがしばしばあった。人種差別はおおっぴらになっていて、今よりもずっとすさまじかった。数少ない国際結婚のカップルは世間からとても冷たい目で見られていた。アルジェリア人はさらにひどい状況に置かれていた。人種差別に加えて、〔独立〕戦争から引き継がれた〔アルジェリア人に対する〕不信感があった。そのため、各コミュニティは別々に固まって暮らしていた⁹。

この証言から、スペイン人移民やアルジェリア人移民などはそれぞれ別々に集住しており、日常的に暴言を吐かれる生活を送り、中でもアルジェリア人移民は独立戦争の影響でより厳しい立場に置かれていたことがわかる。

チュニジア人とモロッコ人

チュニジアは1956年に独立したが、フランス保護領だった時代にはごく少ない人数の移民しかフランス本土に輩出していなかった。独立前の最後の調査では5000人しか本土に暮らしていなかった。独立後はフランスへの移動は増加し、1962年には2万7000人、1964年には5万4000人のチュニジア人がフランスに在住していた。多くは20代、30代の男性だったが、のちに家族の呼び寄せで女性も増えていった。チュニジア人移民の特徴は、貧困家庭の出身ではなく、中産階級の者が多かった点

⁹ *L'Humanité*, « Soixante-huitards, immigrés et oubliés », <https://www.humanite.fr/node/405158>, consulté le 10 septembre 2018.

にある。そのため、小売業やサービス業に従事する者が他のマグレブ系移民に比べ多かった¹⁰。

モロッコ人も保護領時代にはフランス本土に多くの移民を輩出しなかった。1956年の独立後は、とりわけ1960年代半ばから人口増によりフランスへの移動が増えていった。チュニジア人と同様に、若い男性が最初に移動し、のちに女性が家族の呼び寄せで移動するといった形態だった。多くの男性は自動車工場を勤務先とした¹¹。

3. 68年5月を生きた移民たち

68年5月とアルジェリア独立戦争との関連

アルジェリア独立戦争について簡単に触れてきたが、この〈戦争〉¹²は68年5月の運動と決して無関係ではない。なぜならば、5月の運動に参加した者の多くは、1954年から1962年まで続いたアルジェリア独立戦争を何らかの形で体験していたからである。クリスティン・ロスは次のように指摘する。

参加者のなかには、幼少時のアルジェリア戦争の生々しい記憶を持つ人もいれば、10代後半かそれ以降の時期が、1961年10月17日にモーリス・パボン率いるパリ警察が行ったアルジェリア人労働者数百人の虐殺や、シャロンヌ事件、OASが連日のように行った襲撃事件に偶然重なった人もいた。かれらは同年代だったわけでも、こぞって同じ政治遍歴をたどったわけでもない。だがアルジェリア戦争の終盤では、ドゴール政権による警察権力の行使のありようをみな目の当たりにしていた。「68年」が、その数年前に起きたアルジェリアに関

¹⁰ Lequin, Yves, « *Les vagues d'immigration successives* », *op. cit.*, p. 400.

¹¹ *Ibid.*, p. 400.

¹² アルジェリア独立戦争は長年フランスでは公式に戦争として認められてこなかった。この紛争は国家間戦争ではなく、アルジェリアにおける軍の活動はあくまでも国内の治安維持活動として位置づけられていたからである。議会は、戦争と同様の戦闘があったと1974年に認め、1999年に初めて件の紛争を「アルジェリア戦争」という言葉で認めた。詳しくは以下を参照されたい。大嶋えり子「フランスにおけるアルジェリアに関わる「記憶関連法」——記憶と国民的結合を巡って」、『国際政治』、日本国際政治学会、184号、2016年、103-116頁。

わる一連の出来事と時間的に遠くないという事実こそ、80年代に作り上げられた公認の物語が最初に忘却してしまいたい、きわめて重要な「68年」の一面だったのである¹³。

アルジェリア独立戦争は、単に68年の数年前に終結しただけではなく、さまざまな年齢や立場の人々に政治的な影響を与え、その影響は68年5月の運動に現れたといえる。したがって、68年5月は「世界情勢の予測不能な動きがもたらした一種の天変地異でもなければ、『青天の霹靂』（中略）でもなく、この出来事には「アルジェリア反戦運動に遡る長い助走期間」があったのだ¹⁴。68年5月に関する書物は多いが、アルジェリア独立戦争の経験と関連付けるものは少なく、ロスの研究の特徴はこうしたしばしば忘れられてきた視点を取り入れている点にある。

アルジェリア独立戦争と68年5月は時間的近接性を超え、あからさまな国家権力による暴力を見せた点においても類似している。すなわち、前者ではフランスの支配からの解放を目指すアルジェリア独立派とそれを許さない国家権力、そして後者では国家権力による抑圧からの解放を目指す運動参加者と従来の社会的秩序を守らせようとする国家権力という対立が成立し、いずれの出来事においても国家は物理的暴力を以て対抗した。しかも、68年5月の運動で警察が学生に振るった袋叩き等の暴力をしばしば「*ratonnade*」と呼ぶが、これは「ねずみ」を意味する「*raton*」と侮蔑的かつ差別的に呼ばれたマグレブ出身者に対する暴力を元来指す言葉だった。すなわち、68年5月を機に、植民地支配から生まれたこの言葉は、運動家に対する警察による暴力に転用されたのだ¹⁵。

さらに、ロスはアルジェリア独立戦争が多くのの人々に政治的意識を醸成する機会を与えたと論じる。多くの人たちがこの紛争を機に、自分たちの国が抱えている問題に気付いたのだ¹⁶。その問題とは国家権力にまつわるものと言えよう。つまり、

¹³ クリスティン・ロス『68年5月とその後——反乱の記憶・表象・現在』箱田徹訳、航思社、2014年、56-57頁。

¹⁴ 同上、56頁。

¹⁵ 同上、72頁。

¹⁶ 同上、73-84頁。

抑圧的な国家権力からの解放を望む人々を国家権力が主に警察という機関を使用して弾圧する様を見て、少なくとも一部のフランス人は問題意識を持つようになったのである。しかも、その問題意識は国家の帝国主義的政策や国家権力たる警察による暴力行為だけでなく、アルジェリアの独立を阻止するためにフランス軍から派生する形で誕生した秘密軍事組織（Organisation de l'Armée Secrète, OAS）という非合法武装組織によるテロ事件などにも強く影響された。フランス本土でもテロ活動を行っていたOASは、度重なる爆弾テロ事件などによりアルジェリア人のみならず、フランス人の生活を脅かした。したがって、国家による植民地支配という抑圧的な構造および独立派に対する暴力、そして反政府勢力であるOASによる独立派に対する暴力を目撃し、反対運動に加わった人、さらにはそうした反対運動を目の当たりにした人々は政治的運動に目覚めるようになった。

ロスによれば、68年5月の運動に参加した人々の中には、こうしたアルジェリア独立戦争時に芽生えた政治的問題意識が基礎となった人たちがいた。とりわけ、アルジェリア独立戦争時の警察に対する抵抗は、68年5月にも引き継がれているといえるだろう。ただしすでに述べたように、アルジェリアをめぐる問題は必ずしもフランス社会にとって関心の高い事項だったとはいえない。したがって、アルジェリア独立戦争の経験が68年5月の活動家に与えた影響の過大評価には気を付けなければならない。

さらに付け加えると、68年5月の運動の弾圧に対してさまざまな噂が出回った。とりわけ、厳しい弾圧により死者が大勢出たとされた。弾圧は厳しかったが、実際よりも大袈裟に語られたとダニエル・ゴードンは指摘する。1961年10月17日のアルジェリア人によるデモの鎮圧から数年しか経っておらず、その時の記憶がよみがえり、68年の警察の弾圧の比較対象となったとゴードンは論じる¹⁷。1961年の弾圧は広く知られていたわけではないため、こうした比較は一部の活動家の間に限られていた上、この比較は警察による暴力の規模という観点から考えれば不適切だが、68年の一部の活動家たちの間でアルジェリア独立戦争時の警察による弾圧は想起される出来事だった。

¹⁷ Gordon, Daniel A., *Immigrants and Intellectuals. May '68 and the Rise of Anti-Racism in France*, Merlin Press, 2012, pp. 69-70.

68年5月における移民労働者

1968年5月まで、すでに述べたように、各コミュニティは別々に暮らしていた。だが、68年5月の運動は人々をそれぞれのコミュニティから解放したといえる。たとえば、ストラは運動家としての自身の経験を「コミュニティごとではなく、階級ごとに分かれた新しい世界に突如投げ込まれた」と振り返る¹⁸。ロスはさらに次のように分析する。

「5月の出来事」の大きなポイントは、学生が学生として、労働者が労働者として、農民が農民として活動すること、役割を果たすことをやめたところにある。「5月」とは、役割システムの危機だったのだ。この運動は、脱分類化、すなわち場所の自然な「所与性」の中断という政治的実験のかたちを取った。(中略)「68年5月」は、「学生」のアイデンティティや利益そのものよりも、学生というアイデンティティの内部に生じた切断や亀裂に関わっていた。(中略) こうした切断は、他者性(政治的近代にとって2つの古典的「他者」である労働者と植民地の人々によって表される)への政治的開示というかたちをとったのであり、それ自体が、この世代特有の歴史のかつ政治的記憶——植民地解放と強く結びつき、そこに刻まれた記憶から生じていた。(中略) まさにこの切断によって、学生と知識人は、特定の利害を持つ特定の社会集団のアイデンティティと訣別し、より広いもの(中略)へとつながりえたのである¹⁹。

すなわち、諸集団の従来の役割分担に対する挑戦として68年5月は機能したのである。この挑戦はまずはフランス人労働者やフランス人学生から生まれた。多くの移民労働者は最初から運動に参加していたわけではなく、運動が拡大していく過程で、移民も活動するようになったといえるだろう。パリに隣接するブローニュ＝ビヤンクールにあったヨーロッパ最大の自動車製造工場だったルノーの工場には60もの国籍の労働者が勤めていた。フランス人労働者が運動を主導し、当初はアルジェリア人や黒人の労働者は傍観者だった。だが、運動が盛り上がるにつれ、移民労働

¹⁸ Stora, Benjamin, *68, et après : les héritages égarés*, Stock, 2018, pp. 22-23.

¹⁹ クリスティン・ロス『68年5月とその後』前掲書、53-54頁。

者も参加するようになるとともに、労働組合も移民労働者との連帯を表明するようになり、運動の呼びかけ用のポスターは複数の言語を含むようになった²⁰。たとえば、「フランス人労働者と移民労働者、一致団結」という有名なスローガンが生まれ、ポスターにはさまざまな言語で「同一労働同一賃金」と掲げられた(図1)。また、団結しているフランス人労働者と移民労働者を経営者が引き裂こうとしているポスターも有名だ(図2)。

自動車製造工場は以上のとおり、移民を巻き込む重要な運動の場となったが、他の産業でも移民が参加したストライキは見られた。たとえば、運動の主導的な立場にいたわけではなかったが、パリ近郊やペルピニャンあるいはリヨンの建設現場などでスペイン人、ポルトガル人、モロッコ人、ユーゴスラビア人やイタリア人がストに参加したことがわかっている。また、一部の学生やフランス民主労働同盟(Confédération Française Démocratique des Travailleurs, CFDT)は建設現場で働く移民労働者との関係構築に力を入れた²¹。さらに、自動車製造工場や建設現場以外にも、指物職や繊維工業、ごみ収集などの分野の移民労働者もストに参加した。

移民労働者はストに消極的にしか参加しなかった、あるいはストに参加せずに勤務し続けたという認識が一部では共有されているが、実際には移民は労働者代表団にも加わっていた²²。ゴードンも指摘しているが、こうした状況から、フランス人労働者と移民労働者の関係が比較的良好だったことがわかる。まったく移民労働者とフランス人労働者の間に対立がなかったわけではないが、アルジェリア独立戦争時のような険悪な雰囲気はなく、地域的・文化的ルーツよりも、社会階層の意識が人々の連帯を促進したといえる²³。

加えて、多くの移民労働者が68年5月の運動を目の当たりにし、帰国したという見解が一部では共有されているが、ゴードンはこれを否定している。ゴードンによれば、1968年から1970年まで年々移民の数は増えており、68年5月以降にもアル

²⁰ Gordon, Daniel A., *Immigrants and Intellectuals*, *op. cit.*, pp. 62-63.

²¹ *Ibid.*, p. 63.

²² *Ibid.*, p. 64.

²³ *Ibid.*, p. 65.



図1：フランス語の「フランス人労働者と移民労働者、一致団結」の下に「同一労働同一賃金」とさまざまな言語で書かれたポスター。

フランス国立図書館<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b9018507p/>



図2：経営者がフランス人と移民労働者を引き離そうとするポスター。「フランス人労働者と移民労働者、一致団結」。フランス国立図書館<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b9018266h>

ジェリア人やポルトガル人移民がマルセイユから入国していた²⁴。

また、大学で行われた討論にも多くの外国人が参加した。単に聞きに来る者もいたが、発言をする者もいた。なお、討論を聞くだけの者の中には朝から晩まで会場にいる者もいた。さらに、アルジェリア人学生がソルボンヌでフランス学生全国連合（Union nationale des étudiants de France, UNEF）との連帯を示す場面も見られ、討論の場で移民や外国人学生が高い積極性を見せたといえる²⁵。

もともと階級意識が強くなく、運動が開始され、ストに参加すれば解雇の可能性があると懸念した移民も多かったが、徐々にフランス人労働者が移民との連帯を重視するようになるにつれ、移民労働者の不安は和らいでいった²⁶。

68年5月における移民とフランス社会

すでに引用したとおり、ストラは「階級ごとに分かれた新しい世界」が誕生したと68年の出来事を振り返っているが、こうした考えはフランス社会全体にも広まった。すなわち、移民労働者とフランス人労働者の垣根を越えた階級としての連帯が生まれたとガスターは指摘する²⁷。

とりわけ、極左の組織は工場労働者の階層に反人種主義を「教える」必要性を感じていた²⁸。そのため、ストへの呼びかけの中で、移民労働者が直面する問題を訴えた。移民とフランス人の間の交流は従来盛んではなかったが²⁹、マルクス主義的国際主義に裏付けられた移民との連帯への呼びかけを機に、多くのフランス人労働者や学生が移民労働者との接触を図るに至った³⁰。こうした連帯の呼びかけは、資本主義を打倒する国際主義的革命において第三世界を巻き込む必要性から生じていた。すなわち、第三世界をフランス国内で代表しているのは移民労働者だったのだ³¹。

²⁴ *Ibid.*, pp. 67-68.

²⁵ *Ibid.*, p. 73.

²⁶ Gastaut, Yvan, *L'immigration et l'opinion en France sous la V^e République*, *op. cit.*, p. 39.

²⁷ *Ibid.*, p. 38.

²⁸ *Ibid.*, p. 40.

²⁹ Gordon, Daniel A., *Immigrants and Intellectuals*, *op. cit.*, p. 71.

³⁰ Gastaut, Yvan, *L'immigration et l'opinion en France sous la V^e République*, *op. cit.*, p. 40.

³¹ *Ibid.*, p. 42.

極左による移民労働者との連帯には二重に家父長的な側面があったことは指摘に値するだろう。労働者を啓蒙するという点、そして、移民労働者が自ら困窮から抜け出せないため手を差し伸べる必要を訴える点に家父長的な特徴が見て取れる。前者の点に関しては、フランス人工場労働者に反人種主義の「教育」が必要だと認識されていた³²。さらに、革命を遂行するための移民とフランス人の連帯的組織として外国人労働者活動委員会（Comité d'Action des Travailleurs Etrangers, CATE）ができ、その目的は移民労働者にストの手ほどきをすることだった³³。後者の点を、「外国人は物質的な困難に直面しているが、仲間がいないため、どう切り抜けたらよいかかわからない（中略）。外国人がフランスの安寧に寄与していることを認めよう。彼らはわれわれの生活の糧を奪っていない」というストで発せられた文言がよく表している³⁴。すなわち、仲間がいない外国人にフランス人労働者が手を差し伸べる必要性を示している。しかも、外国人がフランス社会に害をもたらすことなく、むしろ貢献していることまで指摘している。つまり、外国人は社会の役に立つ弱者ゆえに助けなければならない対象だという考えがうかがえる。こうした発言の中に、移民労働者の主体性を認める要素が見当たらないため、家父長的な態度が少なくとも極左活動家の一部に見られたといえるだろう。ただしこうした経緯から、徐々に移民労働者たちは活動に参加し、自分たちの組織を結成し、より主体的に運動に関わるようになっていった。

こうした移民に対するフランス人側の態度の変化は極左組織に限ったことではなかった。アルジェリア人をはじめとする多くの移民労働者はスラム街に住んでおり、ほとんどのフランス人はその実態を知らずにいた。だが、たとえばパリ近郊に位置するナンテールにキャンパスが作られたパリ第10大学の学生たちは運動が始まるとともに、キャンパスの近くにあったスラム街に足を運んだ。こうした一部の運動家たちによる活動が、フランス社会全体に移民労働者の過酷な環境を知らしめることになった³⁵。

³² *Ibid.*, p. 40.

³³ *Ibid.*, p. 42.

³⁴ *Ibid.*, p. 40.

³⁵ *Ibid.*, p. 44.

68年の運動の中で、移民に関してさまざまな主張がなされたが、ガストーは次の主立った二つを挙げている³⁶。一つ目はスラム街の解消だ。スラム街は利益追求を支える資本主義社会の暗部であり、多くの移民労働者がそこで貧困に苦しんでいた。二つ目はネイションや国家の問い直しだ。この領域において主張は多様だった。国境の廃止というラディカルな意見もあれば、外国人の法的地位の向上を求める意見もあった。さらに、社会的・法的地位におけるフランス人と移民の格差解消以外にも、文化的な差異の承認も謳われた。すなわち、異なる文化的なルーツを持つ人々が平等な立場を保持できる社会への希求を運動家たちは表明した。

ただし、移民を快く受け入れ、文化的差異を認めようとする雰囲気はフランス社会全体に広まったわけではない。上記の要望が政府に受け入れられなかったのみならず、一部の政治家や当局、メディアは排外主義的な主張を展開した。とりわけ、ストやデモを外国勢力による陰謀だとする主張が主要政治家や主要メディアからも出てきた。さらに、極右団体が移民や共産主義者に暴力を働く場面もあった。しかも、政府は複数の極左団体に解散を命じたにもかかわらず、極右団体にはそうした措置をとらなかった³⁷。

フランスの権力機構は極右団体による移民への暴力を見過ごしたのみならず、移民に対する暴力的措置を自ら講じた。すなわち、運動に参加する移民に対する身体的暴力と強制送還があった。ガストーはスペイン人、イタリア人、アルジェリア人、マリ人、ベトナム人など約300人が強制送還されたとしている³⁸。

こうして国家権力は移民を弾圧したが、さまざまな組織がこれを批判した。人権保護団体のMRAPや人権連盟(Ligue des Droits de l'Homme)は当然批判したが、他にもカトリック、プロテスタントおよびユダヤ教の指導者は共同声明で排外主義に警鐘を鳴らし、フランス労働総同盟(Confédération Générale du Travail, CGT)とCFDTは送還のリスクがある移民の支援に注力した³⁹。強制送還に反対するための集会も開かれるようになるほど、強制送還は68年5月において重要な問題と化した(図3参照)。

³⁶ *Ibid.*, p. 45.

³⁷ *Ibid.*, p. 49.

³⁸ *Ibid.*.

³⁹ *Ibid.*, pp. 49-50.



図3：強制送還に反対する集会の呼びかけ用ポスター。文言は「強制送還に反対！送還されたあるいはされるおそれのある外国人労働者、外国人学生を積極的に支援。6月12日（水）18時から、レピュブリック広場に集まれ！外国人の方は参加をお控えください」。フランス国立図書館<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b90182490/f1.item>

したがって、フランス社会において68年5月は排外主義を助長するとともに、移民に対する差別との闘いの場ともなったといえるだろう。

4. 68年5月の遺産

以上では、68年5月の運動に移民が影響を与えたことを明らかにしてきたが、68年以後のフランスに、移民の観点から検討した際、何が残ったといえるだろうか。ゴードンは「移民に関わる課題の政治化」において68年5月は重大な影響を及ぼしたとしている⁴⁰。自由や平等を理想とする68年5月において移民が完全に平等な主体として見られたとは必ずしも言えないが、そこで見られたフランス人労働者と移民労働者の連帯はフランスにおける反人種差別運動において大きな推進力となった。ストラも「今日、すべての外国人を追放し、国境に完全に鍵を閉めようと〔公約で〕だれが主張するだろうか」と投げかけ、68年5月が移民に対する政治家の態度や世論を変容させたと認めている⁴¹。

移民に対するまなざしが68年5月を機に変容したとはいえ、その変容は現代においてどこまで引き継がれているだろうか。残念ながら、68年5月とって移民との連帯や移民に対する認識の変容を想起する人は少ないだろう。たとえば、メディアでこの出来事を取り上げる際は学生運動が中心となるし、80年代の反人種差別活動家は自分たちを人種主義と闘う最初の世代だと位置づけている⁴²。68年5月と移民の結びつきは忘れられている。68年5月を経験した者やその影響を受けた移民たちが研究者や政治家、記者などになり、現代のフランス社会で活躍をしているが⁴³、彼らの活躍が68年5月と関連付けられることは少ない。そうした意味において、68年5月と移民の関連はしばしば過小評価されているといえるだろう。

パリ市長のアンヌ・イダルゴをはじめ、2018年10月に開始された黄色いベスト (gilets jaunes) の運動との比較をする人がいるが⁴⁴、どこまで近似的といえるだろ

⁴⁰ Gordon, Daniel A., *Immigrants and Intellectuals*, *op. cit.*, p. 220.

⁴¹ Stora, Benjamin, *68, et après*, *op. cit.*, p. 160.

⁴² Gordon, Daniel A., *Immigrants and Intellectuals*, *op. cit.*, p. 222.

⁴³ *Ibid.*, pp. 224-227.

⁴⁴ *Le Parisien*, « Emeutes à Paris : pour Anne Hidalgo, « on n'avait pas vu ça depuis Mai 68 » », <http://www.leparisien.fr/politique/emeutes-a-paris-pour-anne-hidalgo-on-n-avait-pas-vu-ca-depuis-mai-68-02-12-2018-7959024.php>, consulté le 2 janvier 2019.

うか。多くの相違点があるが⁴⁵、ここでは移民に焦点をあてたい。68年5月では移民との連携への呼びかけが見られた。これはより自由で平等な世界の実現に向けて発せられたといえるだろう。一方で、2018年10月から始まった黄色いベストの運動はどうだろうか。移民との連帯や移民の地位向上を訴える向きは見られない。さらに、黄色いベストを自称する人の4割が2017年の大統領選挙で極右の国民戦線 (Front National, FN)⁴⁶のマリーヌ・ルペンに投票したという調査結果が出ている⁴⁷。ルペンの支持者が移民との連帯に意欲的だとは考え難く、黄色いベストの運動が排外主義的だとはいえないが、移民の地位向上に積極的だともいえない。68年5月は移民の地位向上がフランス人の解放にもつながる、という信念に裏付けられた主張によって移民を運動に巻き込もうとする動きを見せたが、黄色いベストの主張は目前の購買力強化や生活水準向上であり、隣人たる移民に配慮する余裕はないように見える。

一方、移民の側を見ると、黄色いベストの運動への参加に当初は及び腰だった。とりわけ、移民が多い郊外の住民はこの運動に積極的とはいえない。むしろ郊外の移民が運動当初から積極的に参加していなかったことを安堵する声まで聞こえている⁴⁸。移民が参加していれば、運動に結び付けられた暴力行為の元凶とされ得たからだ。

⁴⁵ たとえば、ジャン＝ピエール・ルゴフやダニエル・タルタコフスキーのインタビューを参照されたい。LCI, « Les Gilets jaunes, un nouveau Mai-68? "La situation est beaucoup plus chaotique et beaucoup plus inquiétante" », <https://www.lci.fr/social/les-gilets-jaunes-un-nouveau-mai-68-la-situation-est-beaucoup-plus-chaotique-et-beaucoup-plus-inquietante-2106337.html>, consulté le 2 janvier 2019.

Sud-Ouest, « La crise des Gilets jaunes est-elle comparable à Mai 68? », <https://www.sudouest.fr/2018/12/05/la-crise-des-gilets-jaunes-est-elle-comparable-a-mai-68-5628442-10530.php>, consulté le 2 janvier 2019.

⁴⁶ 現在は国民連合 (Rassemblement National, RN) に改称。

⁴⁷ *Slate*, « Ce que révèlent les sondages sur l'identité des «gilets jaunes» », <http://www.slate.fr/story/170766/qui-sont-gilets-jaunes-et-soutiens-portrait-robot-categories-socio-professionnelles>, consulté le 2 janvier 2019.

⁴⁸ *Le Monde*, « Les banlieues hésitent à rejoindre le mouvement des « gilets jaunes » », https://www.lemonde.fr/societe/article/2018/12/05/les-banlieues-hesitent-a-rejoindre-le-mouvement-des-gilets-jaunes_5392966_3224.html?xtmc=gilets_jaunes_banlieue&xtcr=15, consulté le 2 janvier 2019.

したがって、68年5月から50年の時を経て生じた社会運動は大きく異なる様相を呈した。黄色いベストたちは、国籍やルーツ、社会的属性にかかわらず、人々が自由で平等であるべきという理想を掲げることなく、困窮する生活からの脱却を目的としている。言い換えれば、運動の在り方が根本的に違うといえる。なぜ黄色いベストが、68年5月とは異なり、移民あるいは難民など外国にルーツを持つ人々との連帯や彼ら・彼女らの地位向上にまで言及することがない運動となったのかは今後検討していくべき課題の一つだろう。

参考文献

- Alleg, Henri, *La Question*, Éditions de Minuit, 1958. アンリ・アレック『尋問』長谷川四郎訳、みすず書房、1958年。
- Bantigny, Ludivine, *1968. De grands soirs en petits matins*, Seuil, 2018.
- Einaudi, Jean-Luc, *Octobre 1961 : un massacre à Paris*, Fayard, 2001.
- House, Jim, « Pour une histoire des solidarités franco-algériennes, 1954-1981 », *Plein Droit*, n° 75, 2007.
- Gastaut, Yvan, *L'immigration et l'opinion en France sous la V^e République*, Seuil, 2000.
- Gordon, Daniel A., *Immigrants and Intellectuals. May '68 and the Rise of Anti-Racism in France*, Merlin Press, 2012.
- Lequin, Yves, « Les vagues d'immigration successives », Yves Lequin (dir.), *Histoire des étrangers et de l'immigration en France*, Larousse, 2006.
- Rabut, Odile, « Les étrangers en France », *Population*, 29^e année, no° 2, 1974.
- Ross, Kristin, *May '68 and its Afterlives*, University of Chicago Press, 2002. クリスティン・ロス『68年5月とその後——反乱の記憶・表象・現在』箱田徹訳、航思社、2014年。
- Stora, Benjamin, *Histoire de la guerre d'Algérie 1954-1962*, La Découverte, 2004.
- Stora, Benjamin, *68, et après : les héritages égarés*, Stock, 2018.
- Winock, Michel, *La Fièvre hexagonale. Les grandes crises politiques 1871-1968*, Calmann-Lévy, 1986. ミシェル・ヴィノック『フランス政治危機の100年——パリ・コミュニケーションから1968年5月まで』大嶋厚訳、吉田書店、2018年。
- 大嶋えり子「フランスにおけるアルジェリアに関わる「記憶関連法」——記憶と国民的結合を巡って」、『国際政治』、日本国際政治学会、184号、2016年。